

全科協 News

vol.56
NO.3

CONTENTS

- P2 特集
- P10 海外博物館事情
- P12 5月6月の特別展等
- P14 学芸員専門研修報告
- P15 リニューアル情報
- P16 トピックス

| 特集 | Special |

令和7年度 海外科学系博物館視察研修報告



表紙の写真の解説は、P16の「我が館の推しなモノ・コト」をご覧ください

JCSM
Japanese Council of Science Museums Newsletter

全国科学博物館協議会

〒110-8718
東京都台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
TEL 03-5814-9171
<https://jcsm.jp/>

令和7年度海外科学系博物館視察研修報告

令和7年度海外科学系博物館視察研修では、16名の方にご参加いただき、令和8年1月13日(火)から7日間にわたって、韓国の5つの施設を公式訪問しました。ご参加のみなさまに、各館園の視察内容と全体を通しての感想をご執筆いただきました。

SEA LIFE COEX

Sea Life Coex

館の概要

SEA LIFE COEXは、ソウル市内の複合商業施設であるCOEXモール内にある民間の水族館で、2000年5月にCOEX Aquariumとして開館した。2022年からレゴランドやマダム・タッソーなど世界20か国以上で体験型テーマパークやアトラクション施設を展開しているイギリスのMerlin Entertainmentsグループに参入し、同グループの展開する「SEA LIFE」ブランドの一部として2025年7月に現在の名称である「SEA LIFE COEX, Seoul Aquarium」にリニューアルした。

年間来館者は約90万人であり、このうち幼稚園～高校の団体等で約5万人の来館者がある。

職員数は約60名で、20名程度が飼育員(アクアリスト)として、飼育や展示に関する業務をおこなっている。

展示水槽は183個、飼育水槽が90個で、総水量は約3,500トン、展示室と機械室などを含めた総面積は18,253㎡である。展示している生物(海水魚類、淡水魚類、無脊椎動物、海獣類、ペンギン等)は約650種4万頭以上の韓国内では最大規模の水族館である。

飼育展示している魚類をはじめとする生物は、主に海外等から購入しているが、繁殖にも力を入れているという。

内陸にある水族館のため、海水生物展示における水槽内の水は、人工海水とトラックにより運搬した海水を併用しており、LSS(Life Support System)によって循環ろ過している。

展示内容

館内はミュージアムショップなどを含めた14のゾーンに分かれている。主な展示のテーマゾーンについて紹介する。

「Sea at Night」夜の海をテーマとしており、様々な光源を用いて演出された体感型展示である。生きた生物で

はクラゲを中心に展示されており、JERRY LAB.と名付けられた部屋ではクラゲ飼育の様子も見る事ができる。

「Story of Korean Fish」韓国に生息する淡水魚をテーマとした展示コーナーである。韓国内の淡水魚を網羅しているのかわからないが、コイ科の魚類が多い印象を受けた。

「Garden of Korea」韓国の伝統的な庭園をモデルとした空間であり、庭園内の池には金魚や錦鯉などの観賞魚が泳いでいる。

「Rainforest」アマゾンモデルとした熱帯雨林のジオラマの中に水槽が組み込まれ、ピラルクーなど、アマゾンの熱帯地域に生息する魚類や両生類、爬虫類などを展示している。

「Marin Discovery Center」ガラス張りで見学できる研究室である。実際にこの研究室で研究や実験などを行っているとのことである。

「Mangrove & Beach」マングローブ林の海岸をモデルとしたジオラマと水槽でマングローブに生息する生き物を紹介するコーナーである。

「Marvelous Marine Gallery」「Ocean Kingdom」本施設のメインである大水槽の展示。魚類やウミガメなどが生体展示されており、特にサメ類の人気の高いとのことであった。

「Seal Beach cove」海獣類(アザラシ)の展示コーナーである。

「Secret Garden of Seahorses」サンゴや海藻に擬態して隠れている各種のタツノオトシゴ類を展示している。

「Deep Blue Sea Tunnel」大型水槽内に設置されたアクリル製のトンネル内を通り、水の中にいるかのように魚類などを見られる空間である。

「Penguin Playground」ペンギンの展示コーナーである。一時、飼育しているペンギンが増えすぎたことがあり、その時に病気などが流行った経験から現在は個体数が増えすぎないように調整しているそうである。

上記の展示コーナーの他、大水槽の水面上をガラス張りの船底のグラスボートに乗って水中を泳ぐ魚やカメなどにエサを与える体験型アトラクションや人魚などに扮したアクアリストが水槽内の生き物にエサを与える



SEA LIFE COEX, Seoulの入口

ショー、深海をVRで体験するコーナー、似顔絵の描画販売、スポンジポップなどのキャラクターとコラボした水槽の前での撮影コーナーなど、幅広い年齢層の方が楽しめる工夫がされていた。

所感

SEA LIFE COEXは、韓国で初めて「水族館 (Aquarium)」や「アクアリスト (Aquarist)」という専門用語を使用した海洋テーマパークである。大型商業施設内にある民間会社の運営する施設であることから、教育普及よりも海をテーマとしたビジネスの価値向上と発展を目指しており、特に飼育や展示をはじめ、体験プロ



「Sea at Night」のクラゲ生体展示

グラム、調査研究まで幅広く行う水族館の専門職員であるアクアリストの養成や普及に重点を置いているということであった。

水族館や動物園などの生きた生物を飼育展示している施設は、その生きた姿を見るだけで楽しめるわかりやすさがあり、子供から大人まで人気が高い。半面、情報や知識を伝える展示が不十分になることがある。現在、地球上では生物多様性や生態系の保全が急務であることは誰もが認めることであろう。生物を扱う展示施設では、身近な自然から地球規模の環境問題までを伝えることが必須であると感じた。

群馬県立ぐんま昆虫の森 金杉 隆雄

国立海洋遺産研究所

The National Research Institute of Maritime Heritage

1. 施設の概要

国立海洋遺産研究所は、韓国における唯一の国立海洋文化遺産専門研究機関である。水中に所在する文化遺産の調査・発掘、保存処理、復元、展示、教育普及を一体的に実施しており、研究機能と展示機能を併せ持つ体制が整えられている。木浦(もっぼ)および泰安(たいあん)には保存処理施設が設置されており、大型水中文化財にも対応可能な設備を有している。韓国国内における水中文化遺産の調査および保存処理を担う拠点として、研究成果の蓄積と公開を継続的に行っている点も本施設の重要な役割である。

本施設は、1976年に発見された「新安沈船」から引き揚げられた大量の遺物を研究・展示することを目的として1980年に計画され、1994年に国立海洋遺物展示館として開設された。2007年以降には水中遺産に関する研究機能の拡充とともに「国立海洋文化財研究所」へと



外観の様子

改称、さらに2024年には「国立海洋遺産研究所」へと名称変更が行われている。こうした沿革からも、水中文化遺産をめぐる研究・保存体制の発展過程をうかがうことができる。

展示の中心である「新安沈船」は、元代末期に中国・寧波から博多へ向かう途中で沈没した貿易船であり、中世の海のシルクロードの交易船として船体および積載貨物は当時の東アジア海上交易を示す資料として広く知られている。1976年の発見以降、継続的な調査および保

存処理が進められ、引き揚げられた船体と遺物群が現在の展示の基盤となっている。日本との関わりも深い歴史的資料であり、東アジア地域における海上交流の実態を伝える存在となっている。

2. 展示の様子

館内には、常設展示室、企画展示室、子供体験館、屋外展示場（復元船舶等の展示）が整備されている。屋外展示場では復元船舶が設置され、来館者が屋外空間でも海洋文化に触れることができる構成となっている。視察当日は担当者による解説を受けながら見学した。常設展示室では、「新安沈船」の船体が引き揚げられた状態に近い形で展示されており、発掘から保存処理に至る過程や、船上生活の様子について、実物資料と映像を組み合わせで紹介されていた。発掘調査の方法や保存技術についても具体的に示されており、水中文化遺産を保存・活用する一連の取り組みを理解できる構成となっている。

教育普及活動としては、学校と連携した訪問型教育プログラムを実施しており、学校からの申請に基づく出張授業も行っているとの説明があった。これらのプログラムは年齢層に応じて内容が構成されており、体験を通じて水中文化遺産への理解を深めることを目的として実施



「新安沈船」展示の様子

国立光州科学館

Gwangju National Science Museum

韓国には、5つの国立科学館が存在している。これらはいずれも韓国政府の「科学技術情報通信部」が所管しており、科学館を通じて科学技術政策、地域政策、教育政策の推進が図られている。5館は設立年順に、国立中央科学館（大田）、国立果川科学館、国立光州科学館、国立大邱科学館、国立釜山科学館の順に設立されており、い

されている。今回の訪問では、水中発掘体験（模擬発掘装置の使用）、古代船舶の操縦体験、海洋遺物レプリカを用いた触察体験の三種の体験プログラムを体験した。模擬発掘装置は実際の調査方法を再現したものであり、体験を通じて水中考古学の基本的な手法を学ぶことができる内容であった。

3. 博物館の特徴と課題

収蔵品は約10万点におよび、研究成果に基づき展示資料が選定されているとのことである。常設展示は約5年周期で内容を更新しており、研究活動と展示内容が連動する運営体制がとられている。また、多くの展示品が実際に水中から引き揚げられた遺物で構成されており、実物資料を中心とした展示方針が示されていた。

映像技術の活用も随所に見られた。大型沈船展示エリアでは、壁面一体型の大型映像を用いて水中環境を再現したCG映像と音響演出を組み合わせ、水中内の状況を体感的に伝える工夫がなされていた。また、絵巻物などの静的資料についてもCGアニメーションが用いられ、人物や船舶の動きを視覚的に示すことで、当時の社会や船の構造への理解を促す構成となっていた。

一方で、首都ソウルから約350kmほど離れた立地にあることから、来館者層の拡大に向けた取り組みが今後の検討事項として挙げられているとの説明があった。また、子供向け展示についても改修が検討されているが、具体的な時期については未定とのことであった。

本研究所は、水中文化遺産の専門研究機関としての機能を基盤に、調査・保存・研究・展示・教育を連動させた活動を展開している。新安沈船をはじめとする資料群は、東アジアの海上交流史を伝える重要な文化遺産であり、今後もその研究成果と公開活動の展開が注目される。

最後に、本研修視察にあたり、ご協力いただいた皆様、ご関係いただいた皆様に深く御礼申し上げます。

船の科学館 古坂 具巳
和美 美玲

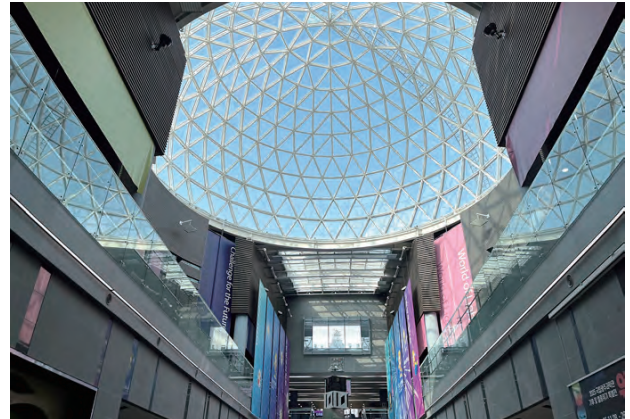
ずれも韓国国内で人口の多い主要都市に配置されている。

このうち光州市は、2020年代において人口約140万人を超える、韓国で6番目に大きい都市である。都市の特徴として、AI産業や光・通信関連産業の集積が進む都市として知られており、国立光州科学館の展示内容にもその特徴が反映されている。館内では「光・科学・芸術」をテーマとした展示が展開されており、地域の産業構造や都市の個性を意識した構成が見受けられた。

国立光州科学館の年間予算は約150億ウォン（約16億円）であり、そのうち事業費は全額が政府からの出資金で賄われている。一方、運営費については政府が60%、光州市が40%を負担している。年間の自己収入は約19億



大きなオブジェとその奥に見えるのが本館の建物。



本館は真ん中を貫く大きな通路があり、中央には大きなガラス屋根、この左右に展示エリアがある。

ウォン（約2億円）である。5つの国立科学館の中では、予算規模・施設規模ともに最も小さい館であるとのことだが、年間入館者数は約95万人（2024年度）で、近年では5館の中で1・2を争う数字であるという。

常設展示の入場料は、大人が3,000ウォン（約320円）、7歳以上の子どもが2,000ウォン（約210円）となっており、日本の科学館と比較すると比較的安価な設定であるという印象を受けた。

●展示エリアの紹介

5つの国立科学館の中で、敷地面積などの規模を比較すると国立光州科学館は最も小さいとのことだが、実際に訪れてみるとその大きさには驚かされる（敷地面積は約10万㎡、展示面積は7千㎡を超える）。メインの展示エリアとなる本館は2階建ての大きな建物で、外観は宇宙船のような形状をしている。館内は中央に通路と吹き抜けが設けられ、これが建物の反対側までつながる構造となっており、その左右に展示エリアが配置されている。

展示は体験型のものが中心であり、15メートルの竜巻発生装置や、物理学の原理・法則を体験できるハンズオン展示など、多様な体験型展示が設置されている。また、韓国の科学館の中では唯一という、風の動きをテーマにした展示エリアが設けられていた。

本館1階には企画展示室があり、その広さは約1,300㎡に及ぶ。訪問時には「地球のSOS」をテーマとした展示が開催されており、地球上で過去に起こった大量絶滅の歴史や、現代社会が直面している「第6の大量絶滅」について紹介する内容となっていた。

また、本館内には2025年1月に新たにオープンした、子どもと保護者が一緒に楽しめるエリアも設けられている。広さは約600㎡で、1日4回、各90分の入れ替え制で運営されており、1回あたり120名が利用できる。内部はデジタルコンテンツを使用せず、すべり台やアスレチックなど身体を動かす遊具、水を使ったプレイグラウンド、木製のおもちゃで遊ぶエリアなどで構成されてい

る。子ども1人につき保護者は2名まで入場可能だが、逆に保護者1人に対する子どもの人数制限はないため、訪問した当日は幼稚園などの団体利用が多く見られた。

この本館は2013年の開館時に整備された施設であるが、敷地内には本館とは別に、複数の展示館が存在する。「AI体験館」は、光州市にAI関連企業が多く集積していることを背景として整備された施設であり、技術革新の進展に合わせて3年ごとに展示を更新する計画があるという。また、「子ども体験館」は、「未来ゾーン（ビッグデータやナノテクノロジーなど）」「創作ゾーン（3Dプリンタや他惑星への移住計画など）」「探検ゾーン（ドローン、ロボット、実験ショーなど）」の3つのエリアに分かれており、これらの科学技術について体験型展示を通じて紹介している。このほか、大きな天体望遠鏡を備えた天文台や、4D体験館や直径12メートルの半球ドームを用いたプラネタリウムなど、多様な施設が整備されている。

●国立館同士のつながり

韓国の5つの国立科学館では、それぞれ独自の展示や事業が展開されているが、他の国立館で導入された事業や設備は、数年後にはすべての館で同様の環境が整うよう、政府から予算が措置される仕組みとなっているという。例えば、2026年現在、8Kシアターを備えているのは国立果川科学館のみであるが、今後数年をかけて、すべての国立科学館の映像設備を8K対応の機器に更新していく計画が進められているようだ。また、光州科学館で進んでいるAI関連展示のノウハウを活用し、果川科学館でもAIに関する展示を展開する計画があるという。

このように韓国では、5つの国立科学館が政府のもとで運営され、国内の主要都市に配置されている。そして、それぞれの科学館は、立地する地域において、科学技術や教育に関する政策の拠点として機能していることを理解することができる。

国立科学博物館 小川 達也

国立中央博物館

National Museum of Korea

国立中央博物館の概要

国立中央博物館は、ソウル特別市龍山区に位置する韓国を代表する博物館である。延床面積約146,765㎡を誇り、2025年の年間観覧者数は650万人を超えるなど、規模・来館者数の両面において、世界的にも有数の博物館として知られている。

常設展示では、先史時代から近世に至るまでの韓国の歴史文化遺産を体系的に紹介しており、実物資料に加えてデジタル技術を活用した映像展示やハンズオン型展示も積極的に取り入れている。これにより、子供から大人まで、さらには外国人を含めた幅広い来館者が、韓国の歴史や文化について理解を深められる構成となっている。

「守る」「つなぐ」ための展示と教育

今回の視察研修では、常設展示とは別に、国立中央博物館の「保存科学センター」と「子供博物館」について展示ガイダンスを受ける機会を得た。

• 保存科学センター

保存科学センターは、常設展示が行われている本館の裏手に位置する建物で、2025年にオープンした施設である。

1階の展示室では、国立中央博物館における保存科学50年の歩みを振り返る特別展「保存科学、新たな始まり 共につなぐ未来」が開催されていた。かつての保存科学者の作業室を再現した展示や、調査カードなどの実物資料に加え、展示ケースの四面すべてに透明なタッチスクリーンを採用し、CT画像で資料の内部構造を閲覧できる仕組みが導入されている。CT画像を操作しながら実物を見る体験は、単なる鑑賞というより、研究現場に立ち会っているような臨場感を覚えた。こうした実物

展示とデジタル展示の融合により、保存対象となる資料について、外観からは分かりにくい状態や特性への理解が深まる構成となっている。

2階から3階部分は、実際の保存修復の現場をガラス越しに見学できるよう設計されており、将来的には一般公開が予定されているとのことであった。博物館の重要な機能の一つである「保存」について、業務にとどまらず、展示や公開を通じてその意義を伝え、保存科学の仕事と重要性を広く社会に発信していく姿勢は、文化財を永続的に継承していくうえで極めて重要であると感じられた。

• 子供博物館

子供博物館は、常設展示館に隣接する西館（教育館）に位置している。対象年齢は5歳から9歳で、5歳未満は保護者の付き添いが必須とされている。入場にはインターネットによる事前予約制（1日5回のセッション制）を採用し、1回あたりの利用時間は1時間20分、各回の定員は280人となっている。これは、混雑緩和と質の高い体験価値を維持するための運営方針によるものである。

展示全体のテーマは「ああ！発見と共感の実践（Aha! Discovery and Empathy in Action）」で、「新しい目で見てみよう」「違う風に考えてみよう」「気持ちをつなげよう」という三つのコーナーで構成されている。展示は、常設展示室に展示されている歴史的文化財をモチーフとして用いつつ、素材や形を観察するといった体験を通して、子供たちが文化財に親しみや興味を持てるよう、さまざまな工夫が凝らされている。

展示空間の色彩設計は、目にやさしいパステルカラーが基調として用いられ、注目してほしいポイントには、濃い色をアクセントカラーとして配することで、自然に視線が誘導されるよう工夫されている。また、低い位置は地面、高い位置は空や宇宙をイメージさせる構成とすることで、空間や展示内容を体感的に理解できるよう設計されている。

さらに、来館者には必ずアンケートを送付し、利用者の意見を継続的に収集・分析しながら展示内容に反映させているという。加えて、センサリールームの設置など、イン



国立中央博物館の外観



子供博物館全景

クルーシブな環境整備も行われており、双方向のかつ教育施設としての役割を強く意識した取り組みがうかがえた。

みんなのための博物館を目指して

国立中央博物館は、「みんなのための博物館」というビジョンのもと、展示、教育、保存、運営のあらゆる側面において、多様な手法を取り入れながら、その実現に取り組んでいることが、今回の視察研修を通じて強く印象に残った。

保存科学センターでは、これまで来館者の目に触れる機会の少なかった保存修復の現場や研究の蓄積を積極的に公開し、博物館の基盤を支える機能そのものを「伝える展示」へと昇華させていた。また子供博物館では、年

齢に応じた空間設計や体験型展示、継続的な利用者のフィードバックを通じて、次世代の来館者を育てようとする姿勢が明確に示されていた。

こうした取り組みを支えている背景には、観覧料（特別展を除く）を無料とし、誰もが気軽に文化に触れられる環境を整えるという、公共施設としての強い覚悟があると感じられた。この姿勢は、国を挙げて文化教育の基盤を支え、自国文化を発信していく博物館の在り方として、非常に示唆に富むものである。

一日では回り切れないほどの規模を持つ博物館であり、再び訪れる機会があれば、次は時間をかけて、館全体や展示物をじっくり見て回りたいと感じた。

日本科学技術振興財団 細川 桃子

国立果川科学館

Gwacheon National Science Museum

概要

国立果川科学館はソウル郊外の果川市に2008（平成20）年に開館した国立の科学館で科学技術情報通信部が所管している。科学館としては国内でも有数の規模を誇り、敷地面積243,970㎡の広大な土地には常設展示館や特別展示館だけでなく昆虫生態館やプラネタリウムなどの施設のほかに屋外展示もあり、国内における科学教育の中核的な施設として重要な役割を担い、2025年度の年間の来館者数は81.3万人と多くの方に利用されている。入館料は大人（20～64歳）が4,000ウォン、子ども（7～19歳）が2,000ウォン、それ以下が無料となり団体料金も設定されている。

常設展示館

常設展示館は科学探検館、未来想像SF館、韓国科学文明館、自然史館、先端技術館、こども体験館の大きく6つのエリアに分かれており、科学館全体の展示品数は935点で、そのうち505点が体験型展示となっている（2025年1月時点）。

当日は展示改修中のため自然史館と先端技術館の視察をすることができなかったが、その中でも特徴的な2つのエリアについて紹介する。

未来想像SF館では自動運転車や医療用ロボット、半導体などが展示され、AIを使った体験型展示などを通じて日々進歩する科学技術やそれによって変化する人間社会とその未来について考えることができる。またさらにその先の未来として宇宙に進出した社会をエイリアンの模型やタイムマシンの形をしたシミュレータ、ロ



外観

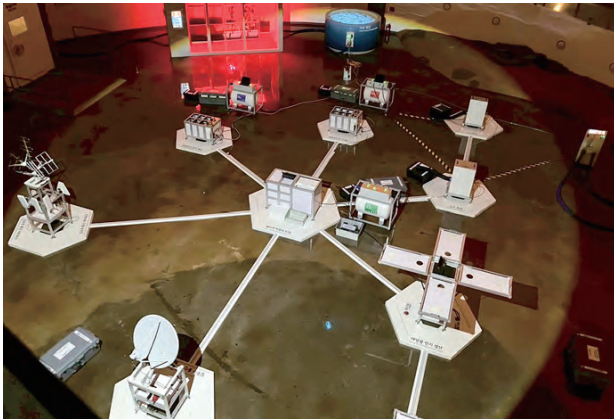
ボットを操るアーケードゲームなど、さながらテーマパークのような作りで表現し没入感を演出しており、最後にはAIによる自動診断で未来の職業について考えさせるような展示までであった。展示全体として未来の科学者を育成するためにまずは子どもたちに科学に興味を持ってもらうことを重視しているように感じられた。

韓国科学文明館では政治、福祉、経済、文化、軍事の5つのテーマをそれぞれ〇〇と科学技術という観点でみつめ、韓国文明の中で科学技術がどのような役割を果たし、どのように発展してきたかを紹介している。例えば生活に根差した科学技術として韓国の気候に適した特徴的な家屋の作りを紹介する展示や、青磁器・白磁器などの陶磁器の技術に関する展示、チマチョゴリなどから見る繊維技術や韓国特有の色遣い、文様についての展示を映像やハンズオン展示をふんだんに取り入れて紹介していた。また、軍事技術に関する展示も多く、年代ごとの

城石の組み方を比較する体験型展示や弓矢を引いて的に当てるシミュレーションゲーム、中に入ることができる大型の船の展示などがあったのが印象的であった。

スペースアナログ

常設展示館と同じ建物内には他に特別展示館や学習支援事業に使用するセンター、多目的ホールがあり、屋外にはプラネタリウムや天文台、火星探査を体験できるスペースアナログと呼ばれる宇宙関連の施設や昆虫だけでなく爬虫類・両生類の生態展示も行っている昆虫生態館、ロケットの模型や列車・鉄道の実物が展示されている屋外展示館などがある。その中でも特に印象的だったのがスペースアナログで、アナログ（Analog）とは宇宙飛行士が宇宙環境に適応するために経験する厳しい模擬訓練のことを指し、宇宙探査をする際に必要となる訓練や、人類が将来火星に到着したときに遂行しなければならない



スペースアナログ

い任務を実際に体験することができる国内唯一の施設となっている。体験コースは3種類で、模擬訓練（アナログ）と解説のみのコースから、実際に火星に降り立ったと想定した場合の任務遂行体験がついたコースまで2,000ウォン～10,000ウォンで体験することができる。模擬訓練（アナログ）では体重が地球の3分の1になった状態で柱をよじ登り、上にある配線を繋ぎなおす訓練などが体験でき、火星での任務遂行体験では、40分の時間制限で電池を運んで適切な場所に設置したり、配線を繋ぎなおして通信機器を組み立てたりと臨場感あふれる体験が可能となっている。

所感

科学技術が急速に進歩している現代社会において、韓国では科学館の振興を通じて教育格差の是正と未来の科学者の育成を図ろうとしており、そのため十分に措置されている印象があった。予算を措置して頻繁に展示更新を行い、出来る限り最新の科学技術に触れられるようにしている点はすごいと感じた。一方で国の方針や重点政策が展示に反映されやすく、近年ではAIやSDGsに関する展示が国内の多くの館で新たに展開されたため、似通った内容になりやすいという点もある。

また、広く一般に科学技術を理解してもらうための展示手法としてデジタルを活用し没入感を演出する展示や、体験型の大規模な展示を多く採用しており、低いハードルで気軽に楽しみながら科学技術に触れることができるため、科学の原理を理解する第一歩として有効な手段の一つであるように感じた。

国立科学博物館 齋藤 朋紀

研修全体を通じての感想

1. 研修概要

今年度の研修は、参加者16名で韓国のソウル、光州、木浦、果川で、私立1館、国立4館の計5館を公式訪問した。あわせて自主研修として、各自で博物館等の視察を行った。個人的には現在担当している来館者サービスの観点から、カムダウンスペース整備の先進事例として聞いていた国立中央博物館を実際に視察できたことは、大きな成果であった。

2. 設置主体による運営の特徴

公式訪問5館のうち、私立館はSEA LIFE COEX水族館のみであった。展示内容や体験プログラムについて

丁寧な説明を受けたが、特に印象的であったのは、顧客満足度を最優先とする姿勢である。展示づくりにおいてもマーケティングの視点を強く意識し、社会的なトレンドや来館者ニーズを踏まえながら柔軟に改修・追加を行っているとのことであった。私立館は寄付を受けることができないため、親会社の方針や収益性を重視する必要があるという説明もあり、設置主体による運営方針の違いを実感した。

一方、国立4館は歴史系2館、科学系2館を視察した。歴史系、科学系とも国の直営、財団・法人による運営形態とわかれており、法人のほうは毎年評価を受けるとのことで、日本の独立行政法人に近い仕組みと思われる。いずれも運営費は主に国費によって賄われており、国家の政策的意図が運営方針に反映されていることがうかがえた。館長は2～3年で交代するとのこと、安定的な運営の難しさについても言及があった。

また、韓国国内には私立科学館も約160館存在し、国立館が支援を行っているという。私立は専門特化型、国立



カームダウンスペース内部

は総合型という傾向が見られるとのこと。今回訪れた国立の施設は2000年代以降に整備されており、敷地や建物の規模が大きい点も特徴的であった。

3. 展示の工夫と更新体制

各館とも展示区画を分け、3～5年程度の周期で順次展示替えを実施しているとのことであった。そのため一部区画が閉鎖されている場合もあるが、計画的な更新により展示の新鮮さを保っている。進歩の早い科学系の展示には理想的な環境であろう。

展示構成では、科学館のみならず歴史系博物館においても体験型展示を取り入れている点が共通していた。映像機器等は新しいものが導入されているが、映像に偏るのではなく、標本や実物資料を活かしながら効果的に組み合わせる来館者が飽きずに見学できる工夫が見られた。

国立の科学館は地域ごとに設置されているが、基礎的な科学展示に加え、それぞれ重点分野を設定し、特色ある展示を行っているとのこと。自然史や地球環境をテーマとした展示も複数館で展開されており、社会的関心の高いテーマに取り組んでいる様子が見えられた。

また、すべての館に子ども向け展示スペースが整備されており、「キッズパーク」や「子ども博物館」など名称は異なるものの、子どもを重要な来館者層と位置付けていることが明確であった。常設展示を一定期間で更新する体制からも、教育への強い意識が感じられた。

4. 教育普及事業とインクルーシブ対応

各館で充実した出前授業のプログラムやポータブル型ハンズオン展示を用意し、主に学校を対象に実施していた。内容は必ずしも学習指導要領に沿ったものではなく、学年を横断して活用される場合もあるとのことであった。

また、障がいのある方にも配慮したプログラムや貸出キットが整備されていた。インクルーシブ対応が特別なものではなく、標準的なサービスとして組み込まれている点は大いに参考となった。特に国立中央博物館のカームダウンスペースは、同館の子ども博物館入口付近に設



質疑応答の様子

置され、感覚の特性に応じた3室を備えているなど、実践的な取り組みが数年前からなされているという話しが印象的であった。

5. まとめ

教育、文化が国家発展の基盤として考えられていることが、国立館の施設規模や予算措置、展示更新の頻度などから感じることができた。

また、各館の職員の方々には大変丁寧に対応していただき、質疑応答や体験の機会を十分に設けていただいた。多数の記念品や軽食の用意など、日本の公立館では難しい心配りにも触れ、制度、文化の違いを実感する場面もあった。

本年度の研修は参加者が比較的少人数であったこともあり、参加者間の情報共有や意見交換が活発に行われていたように思う。公式訪問館だけでなく自主研修先の情報も含め、多角的な視点から学びを深めることができた点は大きな成果であり今後の業務に活かしていきたい。

最後に本視察研修に助成いただいた公益財団法人カメイ社会教育振興財団様、一般財団法人全国科学博物館振興財団様はじめご尽力いただいた関係の皆様へ深く感謝申し上げます。

国立科学博物館 土屋 順子

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向／教育用地学標本



since 1974

地学標本／化石・鉱物・岩石
古生物／レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

◆常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)◆

Fossils, Minerals & Rocks
株式会社 東京サイエンス
 〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル

TEL.03-3350-6725 FAX03-3350-6745
<http://www.tokyo-science.co.jp>
 E-mail:info@tokyo-science.co.jp

Practical Specimens for Study of Earth Science



■ 新設館

仏パリ郊外に、ルノー博物館が開館（2027開館予定）

2027年の開館をめざして、パリ（都市圏人口：1320万人）の郊外のフラン・シュル・セヌにあるルノーのフラン工場に、ルノー社の企業博物館の整備が進められている。新しい博物館では、1889年に創業者ルイ・ルノー（1877-1944）が最初に手がけた車から始まったルノー社の歴史の関連資料を保存・公開する施設として整備される。同館では、約600台の量産車が保存されることになっている。常設展示では、ルノー・コレクションの歴史的な量産車をはじめ、レーシングカー、さらに工業用粘土で作った実物大模型「クレイモデル」や試作品、そして車だけでなく、バスやトラックやルノー社で生産された戦車や飛行機も展示されるようだ。同社には1998年に、パリ近郊のブローニュ＝ビヤンクール住宅街の大邸宅に博物館が設けられ、同社で生産された量産車などが展示されていた（2016年11月閉館）。フラン工場に完成する新しい施設は、古い博物館を拡充したものになる。

また、同社（会社設立は1890年）の企業史料、すなわち経営関係文書、宣伝、設計図などの技術資料もアーカイブ（archive）として、新しい施設で一括保存されることになっている。

さらに同社で長く収集されてきた美術作品（550点以上）も、同様に一括保存されることになっている。このコレクションには、ジャン・デュビュッフェをはじめ、ヴィクトル・ヴァザルリ、ロベール・ドアノー、ロバート・ラウシェンバーク、ジャン・ティンゲリー、アルマン（アルマン・フェルナンデス）、サム・フランシス、ジュアン・ミロなどが手がけた美術作品が含まれている。これらの作品は、新しい博物館が公開されたあと、企画展として紹介される計画だ。

なおルノー社は、この整備事業の一環として、新しい収蔵品の購入費獲得を目的に、2025年12月7日に、フラン工場オークションが開催された。オークションにかけられたものは、同社が長年保管してきた歴史的車両、F1マシン、コンセプトカー、プロトタイプ、そして工場で作られていた時計や備品といったものだった。

Musée Renault. Flins-sur-Seine, Yvelines.

<https://media.renault.com/renault-groups-its-collections-in-a-spectacular-showcase-open-to-the-general-public-2027/?lang=eng>

<https://automobile-museums.com/en/a-renault-museum-in-2027/>

■ 常設展

豪オーストラリア博物館で、気候変動の常設展をオープン

2026年6月3日に、シドニー（都市圏人口：556万人）にある、オーストラリア博物館で、気候変動をテーマにした常設展「スパーク」がオープンする。同展の展示構成は、「気候変動への取り組み」「先住民アボリジニの焼き畑文化」「海藻養殖場」「再生農業」「微細藻類」「生物多様性の支援」「電気輸送」「太陽光発電」「風力発電」「水素エネルギー」「持続可能な建設」「連帯行動（地域的・国内的・国際的）」。

オーストラリアには、驚くべきアイデアを生み出す長い歴史がある。先住民の革新者からWi-Fiの発明者まで、同国のアイデアマンたちは常に先導してきた。今、彼らは、オーストラリアにとって最大の課題の一つである気候変動に立ち向かっている。新しい常設展「スパーク」では、気候危機に前向きな解決策をもたらす発明と、革新的な取り組みが紹介されている。自然史博物館としてスタートした同館（1827設立・1857年開館）の現館長：Kim McKay。

SPARK.

Australian Museum. Sydney, New South Wales.

<https://australian.museum/about/history/exhibitions/spark/>

ウィーン自然史博物館に、鳥類の常設展がリニューアル・オープン（2026年9月）

2026年9月29日の開館をめざして、オーストリアの首都ウィーン（都市圏人口：290万人）にある、ウィーン自然史博物館で、鳥類の常設展示のリニューアルが進められている。「鳥類の生態：鳥たちの新たな生息地」と題した、新しい鳥類の常設展示では、最新の科学的知見に基づき、鳥類の多様性を明確かつ分かりやすく紹介することを目的に整備されている。展示は、「中央ヨーロッパの鳥類」と「世界の鳥類」にわかれている。

「中央ヨーロッパの鳥類」の展示は、鳥類展示の全体の導入部としての性格を持ち、鳥類を特徴づける本質的な要素、すなわち共通の特徴や進化、さらに生態系における重要性に焦点が置かれている。特に、オーストリアを含む、中央ヨーロッパにおける鳥類の主要な生息地、例えば都市、公園、河畔林などに重点が置かれている。個々の生息地の特性と生態学的機能の両方が扱われている。

一方の「世界の鳥類」の展示は、展開部としての性格を持ち、世界的に鳥類の重要な生息環境が紹介されている。例えばアマゾン低地熱帯雨林や世界的に重要な山岳雲霧林のジオラマなど、生き生きと再現されている。カ

ラフルな鳥類が主たる見どころであり、世界中の鳥類の驚くべき多様性を示すだけでなく、砂漠化、生息地の喪失、人間の介入が生物多様性に与える影響といった地球規模の課題にも取り組んでいる。担当学芸員：Dr. Swen Renner（鳥類コレクションの責任者）。1871年に設立された同館（1889年開館）の現館長：Dr. Katrin Vohland。*Frisch gemausert: Die neuen Lebensräume der Vögel*. Naturhistorisches Museum Wien.
https://www.nhm.at/ausstellung/sonderausstellung/ausstellung_detail?termin_id=1768524105633

■ 企画展・特別展

オスロ大学自然史博物館で、小氷河期展を開催

2025年3月18日に、ノルウェーの首都オスロ（都市圏人口：195万人）にあるオスロ大学自然史博物館で、企画展「小氷期：私たちは前回の気候危機をどう乗り切ったのか？」が開幕した。同展では地球が体験した小氷期（1500-1800年）における気候変動と社会変容の関係性を探求し、300年間の気候危機から何か学べるだろうかを問題提起している。異常気象、予測不能な気候、変わりゆく季節。小氷期に経験した急激な気候変動と、現代の気候課題には多くの共通点がある。本展では、気候変動によって加速された社会問題への解決策を見出した人々が紹介されている。

「小氷期：私たちは前回の気候危機をどう乗り切ったのか？」展は、オスロ大学自然史博物館が参加した、オスロ大学人文学部の考古・保存・歴史学科の研究プロジェクト「気候文化：小氷期時代のノルウェー、1500-1800年」と、ノルウェー科学院のオスロ高等研究院の研究プロジェクト「北欧の小氷期」の研究成果が取り入れられている。1814年設立のオスロ大学自然史博物館の現館長：Brit Lisa Skjeltvåle。会期：2026年3月8日まで。

Den lille istiden: Hvordan taklet vi forrige klimakrise?

Universitetet i Oslo Naturhistorisk museum. Oslo.

<https://www.uio.no/english/research/strategic-research-areas/uio-energy-and-environment/news-and-events/events/2025/exhibition-opening-the-little-ice-age-how-did-we.html>

バステイ要塞博物館（オランダ）で、ライン川流域のマイクロ・プラスチック汚染を紹介した企画展を開催

2025年11月8日に、ヘルダーラント州ネイメーヘン（都市圏人口：75万人）にある、バステイ要塞博物館で、ライン川流域のマイクロ・プラスチック汚染を紹介した企画展が開幕した。同展では、ライン川スイス・アルプスを源流とし、ドイツ、フランス、オランダの各国を経由して、北海に注ぐライン川（全長約1,233km）における、マイクロ・プラスチックによる深刻な汚染問題と各国の対応策を紹介している。同展は、EUから資金援助を受けた、ドイツとオランダの研究プロジェクトの成果を紹

介したもので、健全で緑豊かな、活気あるライン川の実現をめざしたものである。1978年設立のネイメーヘン自然史博物館（2017年閉館）を前身とする、バステイ要塞博物館の現館長：Hans Hooijmaijers。

会期：2026年6月14日まで。

De Grote Reis van Klein Plastic.

Museum de Bastei. Nijmegen, Gelderland.

<https://www.debastei.nl/nl/exposities/2025/de-grote-reis-van-klein-plastic>

プラハ国立技術博物館で、世界最長のオートバイ展を開催

2025年11月7日に、チェコの首都プラハ（都市圏人口：230万人）にある、プラハ国立技術博物館で、世界最長のベーマランド・オートバイを紹介した企画展が開幕した。同展は、1924年から1939年まで、現在のチェコのシュルクノフにあった、オートバイメーカーのベーマランド社で製造された、全シリーズのオートバイ30台を紹介したもので、展示品のベーマランド（チェヒアとも）の実車は、いずれも世界最長のものだった。図は、独ドレスデン交通博物館所蔵のベーマランド600cc（全長：3,170mm）。企画協力：ドレスデン交通博物館、ドイツ技術博物館（ベルリン）、チェヒア・ベーマランド・クラブ（プラハ）。担当学芸員：Arnošt Nezmeskal（館長）。会期：2026年3月22日まで。

Böhmerland nebo Čechie. Nejdelší motocykl na světě.

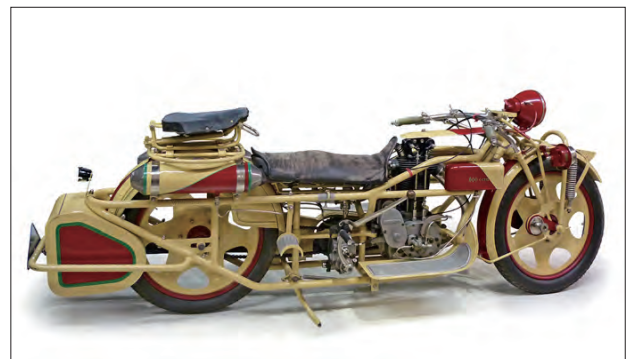
Národní technické muzeum. Prague.

<https://www.ntm.cz/en/exhibitions/temporary-exhibitions/bohmerland-or-cechie-the-longest-motorcycle-in-the-world>

<https://youtu.be/GRC4RsBiUs4?t=51>

<https://www.youtube.com/watch?v=yly6y2BJbto>

[https://en.wikipedia.org/wiki/B%C3%B6hmerland_\(motorcycle\)](https://en.wikipedia.org/wiki/B%C3%B6hmerland_(motorcycle))



図：3人乗りの単気筒バイク「ベーマランド600cc」（1927年製造）

“Verkehrsmuseum Dresden: Dreisitziges Motorrad
“Bohmerland” aus Schluckenau in Böhmen” by SchiDD in
March 2016 is licensed under CC BY-SA 4.0

List of special
exhibition!

5月6月の特別展等

開催館	展覧会名	開催期間
あすなろ会子ども遊学館 (釧路市子ども遊学館)	GW イベント2026「木のおもちゃであそぼう!」	4月29日～5月6日
岩手県立博物館	テーマ展「岩手の絶滅危惧種とネイチャーポジティブ」	3月28日～5月24日
	企画展「すこやかであるために ―円環する生・老・病・死―」	6月20日～8月16日
奥州市牛の博物館	家族で楽しむ企画展2026 「聖なる牛たち」	4月25日～6月14日
山形県立博物館	県政150周年・昭和100年記念 特別展 「土木インフラストラクチャー ～県土に路を拓く～」	5月22日～8月30日
高柳電設工業スペースパーク (郡山市ふれあい科学館)	ホワイエ企画展「美しい星座の世界」	3月20日～5月31日
	ホワイエ企画展「個性豊かな夜空の天体たち」	6月6日～8月30日
つくばエキスポセンター	企画展「体感! つくばどうぶつランド あそんでまなべる動物園」	3月14日～5月10日
産業技術総合研究所 地質標本館	特別展「空間と波長で広がる地質学 ―リモートセンシング―」	2月25日～6月28日
ミュージアムパーク茨城県 自然博物館	第94回企画展 鳥の世界へようこそ! ―知れば知るほど おもしろい―	2月28日～6月7日
日立シビックセンター科学館 サクリエ	ミニ企画展示「カレーのヒミツ展」	4月25日～6月28日
栃木県立博物館	テーマ展「ミミズ」	2025年11月15日～5月31日
	企画展「新しくやってきた標本たち～集めて、守って、活かす～」	4月25日～6月15日
群馬県立自然史博物館	第73回企画展「“害虫”たちの大博覧会 ～見るのはちょっと…?でもね、意外と気になるんです!」	3月20日～5月24日
川口市立科学館	外来生物	6月6日～7月12日
埼玉県立川の博物館	春期企画展「巡礼者は秩父を目指す!」	2月7日～5月6日
	5月企画展「東京藝術大学学生による「河川・水系」作品展」	5月23日～6月21日
埼玉県立自然の博物館	トピック展「古秩父湾 国天然記念物指定10年のあゆみ」	1月31日～6月14日
	企画展「植物たちの生き残り術 ～こうして植物たちは身を守る～」	3月7日～6月14日
	トピック展「カラフルサマーバード!」	6月16日～10月4日
	特別展「古秩父湾 一秩父盆地の海獣の海―」	6月27日～10月12日
千葉市科学館	春・GWの企画展「ようこそ!きぼーる実験室」	3月20日～5月6日
千葉県立中央博物館	生態園トピックス展「生態園のアブラムシ」	2月14日～5月31日
	トピックス展「式年神幸祭記念 香取神宮展」	3月14日～5月31日
	企画展「生薬～自然からの恵み～」	3月14日～6月15日
港区立みなと科学館	2026春の企画展「いろ あはれなり ―科学でひらく日本の色」	3月17日～6月7日
国立科学博物館	特別展「超危険生物展 科学で挑む生き物の本気」	3月14日～6月14日
	企画展 生誕100年記念「かこさとしの科学絵本」	3月24日～6月14日
たばこと塩の博物館	ひきつけるカタチとコトバー看板・引札にみる明治の商い	4月25日～6月21日

※施設の一部を閉鎖している館園や、入館に際し予約を必要とする館園がございます。各館園のホームページをご確認ください。

開催館	展覧会名	開催期間
郵政博物館	重要文化財の公開—ブレゲ指字電信機—	4月4日～5月10日
	ちいちゃくてかわいい展	5月16日～7月20日
神奈川県立生命の星・地球博物館	自然史アーカイブズをひらく	2月21日～5月10日
平塚市博物館	開館50周年記念特別展「ひらはく50年 市民と歩む地域博物館」	3月20日～5月17日
	写真で振り返るひらはく50年	4月11日～5月31日
のとじま水族館	生きものたちの衣・食・住展	5月21日～9月28日
岐阜県博物館	開館50周年記念特別展「尾張徳川家ゆかりの美濃刀」	4月24日～6月28日
富山市科学博物館	企画展「地球時間の旅」	3月19日～5月17日
中津川市鉱物博物館	第44回私の展示室「俳句の刻まれた川原の石—『六歌仙塚』の石碑と中津川—」	3月20日～5月31日
ふじのくに地球環境史ミュージアム	サクラ×さくら —山・里・海を彩る「和」の魅惑—	2025年12月6日～5月24日
	小泉八雲が愛した小さな生きもの	6月19日～11月3日
ディスカバリーパーク焼津天文科学館	春の特別展「まわしまくれ!!くるくるランド」	4月18日～6月28日
名古屋市科学館	特別展「大絶滅展 生命史のビッグファイブ」	3月20日～6月14日
三重県総合博物館	第43回企画展「まつりを旅する 受け継いできた三重の宝もの」	4月25日～6月21日
滋賀県立琵琶湖博物館	民俗学者 橋本鉄男がみた近江 —滋賀民俗研究のいしずえ—	3月17日～5月24日
大阪市立科学館	企画展「時を知りたい ～時をはかる・表現する」	5月9日～6月14日
高槻市立自然博物館(あくあびあ芥川)	企画展「本からひらく自然 ～自然と本と博物館～」	3月14日～6月28日
鳥根県立三瓶自然館	救え!消えゆく生きものたち 2026 ～しまねレッドデータブック 山野の生きもの編～	3月14日～5月24日
人と科学の未来館サイピア(岡山県生涯学習センター)	春季企画展「地球の暗号(プラネット・コード) —ナゾ解き×岩石・鉱物—」	3月1日～5月9日
	天文同好会岡山アストロクラブ天体写真・星景写真展「星降る空へようこそ2026」	6月7日～7月4日
広島市健康づくりセンター健康科学館	食べるを知ろう からだにeat(いーと)も!	3月14日～7月5日
ヌマジ交通ミュージアム(広島市交通科学館)	春季企画展 なつかしいいっぱい!収藏品展—航空機・船舶編—	3月6日～5月10日
防府市青少年科学館	企画展「数と形のナゾとき展～マスレチック・ランドへようこそ!～」	4月18日～7月5日
佐川地質館	特別展「蛇紋岩と謎に包まれた黒瀬川帯」	2025年5月24日～5月10日
北九州市立自然史・歴史博物館	春の特別展「化石のふしぎ展 石になった生き物のヒミツ」	3月20日～5月10日
	企画展「平野家文書」	4月25日～6月21日
福岡市科学館	企画展「星空をつくる物語～プラネタリアムの歴史と未来～」	5月16日～6月26日
佐賀県立宇宙科学館	《ゆめざんが》2026春「ピーコロ×ゲーム展」	3月14日～5月10日
熊本県博物館ネットワークセンター	収藏品展 未来に受け継ぐたからもの	3月24日～8月2日
宮崎県総合博物館	第46回SSP展 自然を楽しむ科学の目	4月25日～6月7日

※次号(7月号)に掲載の7月8月の特別展情報は5月20日(水)までにお寄せください。

オンライン学芸員専門研修を開催しました!

国立科学博物館では、全国の博物館等に勤務する学芸員や職員の方を対象に、一層の資質向上を目的としてオンライン学芸員専門研修を開催しました。

令和7年度は、当館の植物研究部が調査・研究、収集・管理、教育方法について、ライブ配信型（Zoom）の講義を行いました。

本研修は全国科学博物館協議会と国立科学博物館が主催しており、本年度も北海道から九州まで、幅広い地域の自然史系博物館や歴史博物館、植物園、科学館などから38名の方が参加されました。（協議会加盟館からは20館22名が参加されました）

令和8年度は当館の動物研究部による研修を予定しております。ふるってご参加ください。

国立科学博物館 学習課



「維管束植物の調査・研究」講義の様子



「植物標本の多様性とコケ類標本の収集・管理」講義の様子



「淡水域の微小生物の分類方法と教育方法」講義の様子

参加者の声

- ・「現場での実践経験に基づいた内容で、基本的な標本の作製方法だけでなく、作製のコツや記録の取り方、保管方法などを知り、大変勉強になった。特に配架方法は悩んでいたところなので、これから取り入れていきたい。」
- ・「標本作成の手順から、収蔵庫管理に関して、学びたいことのほとんどをお話いただけて、大変満足しています。特に収蔵庫の植物の整理方法について、どの分類を基準にするのかを聞きたかったので、詳しく聞けてよかったです。他の館も同じような悩みをもっていることにも気づくことができ、勇気づけられました。」
- ・「植物を扱っていてもコケは専門ではないため、標本の作り方や整理の仕方について、全体を通して再確認でき、とても有意義であった。コケ標本の整理（主に配架）を進めている最中のため、参考にできる点が多々あった。」
- ・「詳しい資料をたくさん教えていただいたこと、顕微鏡下の様子を動画で見せていただいたことから、微小生物について、興味関心が高まりました。顕微鏡はそろっているのですが、まずは自分で観察してみたいと思います。住んでいる地域は淡水域が多いため、うまくいけば教育や展示に応用させていこうと思います。」

リニューアル情報

※次号(7月号)に掲載のリニューアル情報は5月10日(日)までにお寄せください。

奥州市牛の博物館

[更新箇所] 1階展示コーナー「岩手の畜牛文化」

[更新内容] 「牛と人との共存を探り、生命・自然・人間を知る」をテーマとする牛専門博物館である牛の博物館は令和7年度に開館30周年を迎え、世界初となる和牛4品種のひとつ「日本短角種」の剥製が常設展示に加わりました。

日本短角種は、旧盛岡藩で飼養されていた在来牛「南部牛」をルーツに持ち、東北地方の自然環境に適応した力強い牛です。一方、岩手県南地域は、稲作の副産物である稲わらを餌とする黒毛和種の肥育が行われ、「前沢牛」をはじめとした銘柄牛肉の生産が発展してきました。

このように岩手県で飼育されている「黒毛和種」と「日本短角種」が東北地方の自然環境や歴史に根差して発展してきたことを紹介し、「和牛」文化の多様性、奥深さを感じていただける展示を目指しました。

[更新面積] 143.7㎡ (1階常設展示室)

[公開日] 2026年2月21日

[準備期間] 1年(展示替えは20日間)



1階展示室 岩手の畜牛文化



日本短角種剥製

空間創造によって
人々に「歓びと感動」
を届ける

株式会社 乃村工藝社

東京都港区台場2丁目3番4号 TEL: 03-5962-1171 (代表)

Tanseisha

丹青社は今年、創業 80 周年をむかえます。

80th ANNIVERSARY

空間づくりのプロフェッショナル 株式会社 丹青社

東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス19F
TEL 03-6455-8100(代表) URL www.tanseisha.co.jp
札幌・仙台・横浜・名古屋・京都・大阪・福岡・那覇

花の香りを分子で体験しよう!



仙台市科学館HP
<https://www.kagakukan.sendai-c.ed.jp/>

仙台市科学館の人気展示「香りファクトリー」は、花の香りが“分子の組み合わせ”でできていることを体験的に学べる装置です。ラベンダーやジャスミンの香りをつくるエステル類や、基本となる香り（キーベース）を嗅ぎ比べ、混合比を予想しながら調合に挑戦します。ボタンを押すと香りが滴下され、その場で自分だけの香りを完成させることができます。植物が進化の中で獲得した“香りのメッセージ”を科学的に探る展示装置です。

※ジャスミン様のフローラルな香りをもつベンジルアセテートなどのエステル類、および香り（キーベース）のサンプルは、高砂香料工業(株)様よりご提供いただいています。



次回執筆者は、北九州市科学館（スペースLABO）学芸員 小林 宏紀さんです。

新規 巡回展示募集

加盟館園がお持ちの資料、あるいは新規に製作する企画展示等について

巡回展事業へのご提供をお願いいたします。

ご提供可能な展示がある場合、またご質問がありましたらメール等で事務局までご連絡ください。

みなさまからのご連絡お待ちしております。

※なお本事業は、所有される資料をお譲りいただくものではありません。



全国科学博物館協議会

全科協ニュース編集委員

石浜佐栄子（神奈川県立生命の星・地球博物館主任学芸員）
笠松 舞（新江ノ島水族館 なぎさの体験学習館チーフキュレーター）
筋野 美穂（多摩六都科学館学芸員）
平田慎一郎（きしわだ自然資料館学芸員（特命参事））
弘田 澄人（川崎市青少年科学館（かわさき宙と緑の科学館）
天文担当係長）
丸山 啓志（千葉県立中央博物館研究員）
望月 貴史（岩手県立博物館専門学芸員）
関根 則幸（国立科学博物館学習支援部広報・連携課長）

全科協事務局

国立科学博物館
学習支援部 広報・連携課
（担当：登島・斉藤・清水）
TEL 03-5814-9171
info@jcsm.jp
発行日 2026年5月1日
発行 全国科学博物館協議会 ©
〒110-8718
台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
印刷 株式会社セイコー社